

## 【論文】

# 清末北京語の一斑

—『燕語新編』を資料として—

清代末年の北京話—以《燕語新編》为資料—

山 田 忠 司

Tadashi YAMADA

要旨：清末の1906年に日本で、『燕語新編』なる中国語会話テキストが刊行された。このテキストはその当時の社会情勢からしても、その場面設定からしても当時の北京で実際に話されていた北京語を反映しているものと予想される。小論はその言語の特質から当時の北京語の実態を探ろうとするものである。その手法として、小論では太田1964, 1969の論考に照らし、また同時代の資料でその性格も類似している『燕京婦語』との比較を行った。結論は以下の通りである。『燕語新編』の言語が北京語であることは疑う余地が無いが、多くの点で『燕京婦語』とは異なっている。その事実より単に北京語と言ってもそれは均質的なものではないことが伺える。

キーワード：清末、北京語、燕京婦語、小額、官話指南

## 0. はじめに

日本における中国語教育は1876年（明治9年）以降それまでの南京官話中心から北京語中心に移行した<sup>1)</sup>。それをうけて『官話指南(1882年初版)』などの北京語を教授するための会話テキストがいくつか出版された。女性向け北京語テキストである『燕語新編(1906年出版)』<sup>2)</sup>もその一つである。女性向けと考えられるのは登場人物が女性中心であり、場面設定も女性が遭遇するであろう状況となっているからである。該書はその目的からしても、当時の北京語の実態をかなり忠実に反映しているものと考えられる。

本稿はその内容から清末の北京語の一斑を探ろうとするものである。手法としては太田1964, 1969で指摘されている北京語の特徴とどの程度一致するか、また時期を同じくして出版された『燕京婦語(1906年頃)』(これも女性が主な登場人物の北京語会話教科書である)<sup>3)</sup>の言語と比較し、当時の北京語の実態を考察したい。

1.0 北京語の文法的、語彙的特徴という問題に関してはつとに太田辰夫先生に精緻な研究がある。太田1969においては7つの常用語を材料として、またそれに先立つ太田1964においては項目として72項目、単語として100以上を取り上げ、北京語の実態を描写している。本節では『燕語新編』の言語の状況をこのふたつの論考に準じ、報告する。記述の方法として最初に太田の述べる北京語としての特徴を〈 〉内に記し、⇒の右側にそれが『燕語新編』ではどうなっているかを示す。以下1.01～1.07は太田1969の、1.08～1.24は太田1964の指摘である。

1.01 〈一人称の包括形(inclusive)と除外形(exclusive)を“咱們”“我們”で区別する。“俺”“咱”は用いない〉⇒合致しており、本書でも区別されている(表記は“咱們”と“俺們”が混在している)が、下のような例外もある。“俺”“咱”は用いられていない。

1) 比方說咱們要雇厨子或打雜兒的趕車的老媽兒～(p.198)

例えば私たちが料理人、召使い、車夫、お手伝いを雇おうとしますと～

1.02 〈介詞“給”を有する〉⇒合致しており、用例も多数ある。

2) ～再親身給您道謝(p.74)改めて直接あなた様にお礼申し上げます。特徴的なこととしてはほとんどが“給”の後ろの名詞に益する例であり、害する用例は下記の1例しかない。

3) 又給愚夫愚婦添了一番杞人之憂(p.148)

また愚夫愚婦に杞憂を与えました。

介詞以外の“給”についても合わせ述べておく。

・動詞のすぐ前に前置される“給”も多くあるが、“給”の後ろに名詞を補えない純助詞的なものと介詞の目的語が省略されたものとの2種類ある。

4) 託您給打聽打聽 (p.15) “給”の後に名詞を補える。

あなたに（私のために）問い合わせていただきたいのです。

5) 雖然不用我親自做也得我給打點好了 (p.11) “給”の後に名詞を補えない。

私自身が直接やる必要はありませんが、検査はちゃんとしてやらなければなりません。

・兼語文の例は2例ある。

6) 那麼把錢給他拿出去罷 (p.216)

それではお金を彼に持って行かせましょう。

7) 連這五塊錢的洋錢票兒一塊兒給他拿出去～ (p.243)

この5元の札も一緒に彼に持って行かせ～

・“賣給、交給、教給、遞給”などの“V給”の形式は多い。

・本来北京語ではないとされる受け身を表す“給”も一例だけだが、存在する。

8) 你沒給人支使過麼 (p.203) おまえは人に使われていたことはないのか。

1.03 <助詞“來着”を用いる> ⇒合致しており、用例も多数ある。

9) 我是帶着帳子來着 (p.31) 私は蚊帳を携えておりました。

1.04 <助詞“哩”を用いず“呢”を用いる> ⇒合致しており、“呢”の用例は多数あり、状態を表す場合、疑問詞と共起している場合がある。また

“哪”もあるが、“呢”との違いについては不明確である。

・以下2例は状態を表す。

10) 是現在還吃藥呢 (p.19) はい、今でも薬を飲んでおります。

11) 那兒的話呢 (p.8) どういたしまして

・以下2例は疑問詞と共起したもの。

12) 我多僂聽您回話兒呢 (p.16) 私にいつお返事を頂けますか。

13) 那麼吃甚麼呢 (p.41) それでは何を召し上がりましたか。

・以下2例は“哪”の例。

14) 您家裡都有甚麼人哪 (p.6) お宅は何人家族ですか。

15) 您忙甚麼了, 天還早哪 (p.20)

そう、お急ぎにならないで、まだ時間は早いです。

1.05 〈禁止の助詞“別”を有する〉⇒合致しており、用例も多数ある。

16) 您別提了 (p.30) おっしゃいますな。

1.06 〈程度副詞“很”を状語に用いる〉⇒合致している。本書には3例ある。しかしながら、数としては「形容詞+“的很”」の形式の方が多く、9例ある。

17) 我聽說您英國話也說的很好 (p.191)

貴方は英語もとてもお上手だそうですね。

18) 實在短禮的很 (p.18) 大変失礼しました。

1.07 〈「形容詞+“多了”」で“ずっと、はるかに”の意を表す〉⇒合致しており3例ある。

19) 您臉上可顯着瘦多了 (p.36)

あなたのお顔は非常にお痩せになりました。

1.08 〈自称の代名詞“自各兒”がある(太田1964.249)〉⇒合致している。

本書には2例ある。

20) 那個活還得您自各兒做麼 (p.10)

その仕事は貴方ご自身でなさらなければいけませんか。

1. 09 <名詞のあとに“甚麼的”をつけて“等”の意をあらわす (太田1964. 250)>

⇒合致している。本書には4例ある (本書では“麼”と表記されている)。

21) 還有許多的石人馬甚麼的 (p.54)

それから多くの石像の人、馬などがあります。

1. 10 <“いつ”を表すのに“多偌”“多會兒”を用いる (太田1964.250)>

⇒本書では“多偌 (啗)”はあるが、“多會兒”はない。また“多們”で“いつ”をあらわすことがある。

22) 您是多偌從貴國動的身 (p.89) 貴方はいつお国から出発されましたか。

23) 您多們有工夫上我們那兒坐一天去 (p.4)

いつか時間があれば私の所へお越し下さい。

1. 11 <北京では“這程子”を用い、“這些時”を用いない (太田1964. 250)>

⇒合致している。“這程子”が2例あり、“這些時”はない。

24) 您這程子都忙甚麼哪 (p.10)

貴方はこのごろ何でお忙しいのでしょうか。

1. 12 <金額を問う“多兒錢”といういかたは南京官話にはなく、(太田1964. 251)> ⇒合致しており、“多兒錢”が使われている。

25) 換了多兒錢哪 (p.230) いくら換えてきたの。

1. 13 <南京官話には“倆”“仨”など数詞と量詞の合体した語がなく、(太田1964. 252)> ⇒本書には“倆”のみあり、“仨”などはない。

26) 僭們姐兒倆雖然沒會過 (p.2)

私たちはお目にかかったことはありませんが。

1. 14 <“～的(得)慌”は一部の心理・感覚をあらわす動詞につきその程度をあらわす(太田1964.256)> ⇒合致しているが、用例は一例のみ。不快感をあらわしている。

27) ~您也不慫悶的慌麼 (p.135) ひどく気がふさぎませんか。

1. 15 <起点を表すには北方では“起、解、打”を用い、南方では“從、由”を用いる(太田1964.258)> ⇒本書では“起、解”のほか、“從”が用いられているが、“打”はない。そのほか“自”が用いられているのは珍しい。

28) 起那麼就上了居庸關了 (p.160) それから居庸関に登りました。

29) 你解這樁子上拴起拴到那棵樹上不好麼 (p.233)

お前はこの杭から繋ぎ始めてあの木まで繋いではどうですか。

30) 從那麼就到了南口 (p.52) それから南口へ行きました。

31) 僭們姐兒倆自出了門子直到今兒個 (p.3)

私たち二人は嫁入りしてから今日までお目にかかりませんでした。

1. 16 <“大”を程度副詞に用いる。しかし、それほど自由には用いられない(太田1964.260)> ⇒合致している。本書には3例ある。

32) 老爺說昨兒的湯做的大口陳 (p.210 筆者注:“陳”は“沈”の誤記か?)

旦那様は昨日のスープは辛すぎると言われました。

1. 17 <“すっかり”“ぜんぜん”などの意を表す“所”がある(太田1964.262)>

⇒合致している。用例2例。

33) …, 所沒個住了一連三天下得平地水深三尺。(p.40)

まったく止まらずに三日の間降り続け、水が地面から三尺になりました。

1. 18 <“準”を“たしかに、きっと”の意の副詞に用いる(太田1964.262)>

⇒合致している。用例2例。

34) 您準猜不着他們和我要多兒錢 (p.113)

あなたはきっと彼らがいくら欲しいと言ったか当てることができませんでしょう。

1. 19 <“管保”はあるが“保管”はない(太田1964.262)> ⇒合致している。

“管保”のみ3例ある。

35) 管保花兒還都没發芽兒了罷 (p.111)

おそらく花は未だ芽を出しておりません。

1. 20 <“敢情”“敢自”がある(太田1964.263)> ⇒本書では“敢情”はある(5例)が、“敢自”はない。

36) 您瞧，敢情外頭飛起雪花兒來了 (p.116)

ご覧なさい。なんとまあ外では雪が舞ってきましたよ。

1. 21 <“左不過”はあるが、“横豎”はない(太田1964.263)> ⇒合致している。本書には“左不過”のみ3例ある。

37) 左不過家常兒零碎活。(p.10)

いずれにしても平常の細々した家事に過ぎません。

1. 22 <“也許”“行許”など“許”によって推測をあらわすのも北方語である(太田1964.263)> ⇒本書では“還許”“也許”が使われている。

38) 今兒還許要下雪啊 (p.115) 今日はいよいよしたら雪が降ります。

この“還許”という語は『兒女英雄傳』にも見える。

1. 23 <類似をあらわす“…似的”を用いる(太田1964.264)> ⇒合致しているが、用例は1例のみ。

39) 仿佛在那兒見過似的 (p.2)

どこかでお目にかかったことがあるようです。

1.24 <“不咖”“別咖”のごとく接尾辞“咖”を用いる (太田1964.265)>

⇒本書には“不咖”が2例ある。

40) 不咖了, 這我可要走了 (p.11)

駄目です。私は帰らなくてはけません。

2. 『燕語新編』に見えるその他の言語的特徴

2.1 単音節動詞に“着”をつけ、これを繰り返すことで、その動作を継続しているうちに別の事態が発生したことをあらわす用法は老舎がよく用いるものであるが、管見の限りでは『紅樓夢 (1750年頃)』『兒女英雄傳 (1850年頃)』『小額 (1908年)』には見えず、『三俠五義 (1848年頃)』『評書聊齋志異 (民国初期1910年代)』には見える。この用法は本書にもある。

41) 説着説着粗風暴風的可就下起來了 (p.59)

話しているうちに暴風雨になってきました。

2.2 兒化韻について

北京人が兒化韻を多用することはよく知られているが、それを反映した言語資料は少ない。本書には多くの兒化韻が記されており、これは大変貴重なことと言えよう。以下に『現代漢語詞典2002年増補版』では兒化の表記のないものを中心に例をあげておく。

見面兒 (p.4) 小姐兒 (p.7) 家常兒 (p.10) 古跡兒 (p.57)

耐心煩兒 (p.142) 皮包兒 (p.257)

2.3 『紅樓夢』『兒女英雄傳』では“覺得”、“覺着”共にあるが、本書では“覺着”しかない。

42) 一點兒都不覺着冷了 (p.111) 少しも寒いと感じませんでした。

2.4 『小額』に見られる“頭”で“前”を表す用法（太田1970.363）が本書にもある。

43) 頭幾天要不下雨我早就來了 (p.124)

二、三日前に雨が降らなかったなら私はとっくに来ておりましたのに。

2.5 太田1970.369では『小額』には、通常“的”を必要としない副詞に“的”をつけた例が多いと報告されているが、その例は本書にもある。

44) 我屢次的給您打德律風去問候您納 (p.33)

私は度々電話であなたにご機嫌伺いをしました。

2.6 時間の長いことを表す“老”を有する（太田1975.329）。

45) 若是老打不起天來甚麼都不甚相宜 (p.145)

もしずっと天気が良くなりませんでしたらどんなものにもあまり良くないです。

2.7 “簡直的”は本来、“率直に、あからさまに、まっすぐに”の意味であったが、現代では“まったく、まるで”の意味である（太田1958 p.290）。本書では現代語の意味で使われている。

46) ～三四天沒能吃東西，簡直的嘔吐的～(p.87)

三四日食べられず、ずっと吐いてばかりおりました。

### 3. 『燕語新編』と『燕京婦語』との言語的比較

『燕語新編』と同様、北京在住の日本人女性のための北京語会話テキストとして『燕京婦語』が存在する。出版年もほぼ同時期である。以上述べてきたような『燕語新編』の言語的特徴をこの『燕京婦語』はどの程度、共有しているのだろうか。本節ではそれについて述べる。

#### 3.1 『燕語新編』と『燕京婦語』の言語上の一致点

『燕京婦語』も『燕語新編』と同様、太田1969の常用語7語は有するものの、上に述べた『燕語新編』の北京語としての特徴と合致するものは以下の4点に過ぎない。

- (1) “準”を“たしかに、きっと”の意の副詞に用いること
- (2) 接尾辞“咖”がある。ただし、表記は“不及(了)、別及了、別咖”となっている。
- (3) いつをあらわす“多偌”がある。
- (4) 金額を問う“多兒錢”が存在する。

### 3.2 『燕京婦語』に見られ、『燕語新編』に見られない言語的特徴

(1) 『燕京婦語』には「行く」を意味する“克”が100例近く見られるが、『燕語新編』には存在しない。『燕京婦語』の他にこの“克”を使用する資料としては『小額』が代表的であるが、その数は10例程度に過ぎず、この点が、『燕京婦語』の最大の特徴と言えよう<sup>4)</sup>。

(2) 『燕京婦語』には「数詞+量詞」が合体した“四啊”“五哇”“六哇”“幾呀”があるが、『燕語新編』には“倆”しかない。

(3) 『燕京婦語』には三人称尊称の“他”があるが、『燕語新編』にはない。

(4) 命名するばあい北方語では“管…叫”といい、南方ではこのいいかたをしない(太田1964.260)とされる。『燕京婦語』に例があるが、『燕語新編』にはない。

47) 他管着比耳酒叫三寶酒 (p.48)

その人はビールのことを三鞭酒と言いました。

(5) 『燕語新編』にはない起点を示す“打”が『燕京婦語』にはある。

48) 我打這麼還拜幾年哪(p.32)

私はこれからまだ数軒年始回りをします。

(6) 時間の到達をあらわす“趕”（太田 1964. 259）は『燕語新編』にはないが、『燕京婦語』にはある（表記は“赶”）。

49) 赶這一件衣裳洗完了那一件衣裳曬乾了（p.28）

この一枚が洗い終わったときにはもう一枚は乾いています。

(7) 北方で用いられるとされる“趕緊”（太田1964. 261）は『燕語新編』にはなく、『燕京婦語』にはある。

50) 若是有工夫趕緊的拜年也得五天（p.30）

時間があって急いで年始回りをしても五日はかかります。

(8) いつをあらわす“多會兒”は『燕語新編』にはないが、『燕京婦語』にはある。

51) 都拾掇好了得多會兒得呀（p.112）

すべて修理が終わるのはいつになりますでしょうか。

#### 4. まとめと今後の課題

『燕語新編』は『燕京婦語』と共に常用語7項目において、完全に北京語としての特徴を有している。また上記第1節で述べたように『燕語新編』は太田1964の北京語の特徴と多くの点で合致している。それは、『燕京婦語』と比べれば顕著である。したがってこの両書がともに北京語であるとしても、その実態はかなり異なっているということになろう。特に『燕京婦語』に100近くある“克”が『燕語新編』にはまったく見いだせないのは興味深い。“克”は鱒沢1998に述べられているようにそれを記録した資料が極めて少ない特殊な語彙である。鱒沢1998はこの語について上流旗人内部の言葉だったのではないかと推定しておられる。しかしながら、社会

的階層という点では『燕語新編』にも清国皇太后謁見をひかえた清国駐割日本公使夫人に中国人が助言を与えるという設定部分(p.155)があり、こちらも上流旗人がその舞台であり、社会的階層の差とは言い難いと思われる。それではこの“克”の語の問題も含め、この両書における言語の差異は一体何に起因するのであろうか。最も可能性が高いと思われるのは北京語地区内における地域的な差異であろう。残念ながらそれを検討する手がかりは目下、見いだせていない。この問題を考えるためには、両書の著者の経歴、成書の背景なども調査する必要がある。すべて今後の課題としたい。

本稿での考察を通して、少なくとも単に北京語と言ってもそれは決して均質的なものではないことは明らかになった、と言えよう。

最後に触れておきたいのは、このようなテキストの需要はどの程度あったのかという点である。上に述べたように日本人女性に清国駐割日本公使夫人という役柄が与えられている部分(p.153)があるが、まさか公使夫人一人のために本書が編纂・出版されたとも思えない。本書出版の背景を探る上で、合わせ調査したいと考えている<sup>9)</sup>。

〈注〉

- 1) 六角恒廣1955に拠る。
- 2) 小論は波多野太郎編『中国語学文学資料集成』第2編所収の『燕語新編』に拠った。
- 3) 『燕京婦語』の出版年は鱗沢彰夫著『燕京婦語』—翻字と解説—(1992年 好文出版)における推定による。小論が拠った『燕京婦語』も同書である。
- 4) “克”については鱗沢1998に詳細な研究がある。
- 5) 『官話指南』には北京在住と思われる日本人が妻を伴って旅行にでるというくだりがある(台湾益智図書公司版p.49裏)が、家族帯同で中国赴任というケースも少なからずあったことが伺える。

参考文献

- 太田 辰夫1958 『中国語歴史文法』 江南書院  
— — 1964 「北京語の文法特點」『久重福三郎先生、坂本一郎先生還暦記念中国研究』所収。小論は太田辰夫著『中国語文論集(汲古書院

- 1995)』に依った。
- 太田 辰夫1969 「近代漢語」『中国語学新辞典』 光生館  
— “ — 1970 『『小額』の語法と語彙』神戸外大論叢21巻-3号, 23巻-3号, 1970,  
1972 小論は太田辰夫著『中国語史通考(白帝社1988)』に依った。
- “ — 1975 『『兒女英雄傳』の副詞』神戸外大論叢26巻-3号, 1975  
小論は太田辰夫著『中国語史通考(白帝社1988)』に依った。
- 六角 恒廣1955 「明治期における日本の中国語」早稲田商學114号  
鱒沢 彰夫1998 『『燕京婦語』の社會的方言kèについて』中國文學研究第24期

〈付記〉

本稿は2003年5月25日中国近世語学会での筆者の口頭発表の内容がもとになっている。その際、ご出席の先生方と本学査読委員の先生方より貴重な御示教を賜った。心からお礼申し上げたい。しかし、筆者の力不足、時間不足によりそのご意見を本稿に十分織り込めなかったのは誠に遺憾である。